

レポート Report

大磯町郷土資料館だより
2015・2・27

35

目次

- 2 | 高麗寺村絵図の修復
- 4 | 飴屋「あめ新」と坂田山心中事件の観光化
- 5 | 海の森クラブ活動報告
- 6 | 横溝精彦コレクションの郷土玩具について
- 8 | 博物館実習生による「大磯の山—鷹取山を知る—」展



修復した高麗寺村絵図

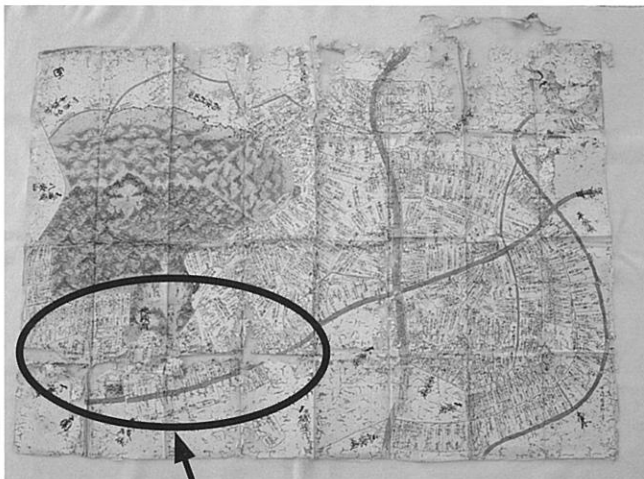
(「高麗寺領相模国陶綾郡高麗寺村絵図」曾根田重和氏旧蔵資料／当館所蔵)

高麗寺村絵図の修復

高麗寺村とは、現在の大磯町高麗にあたる地域であり、江戸時代、現在の高来神社の前身にあたる高麗寺の寺領地であった村です。当館では、前年度の平成25年度に、秋季企画展「一村寺領 高麗寺村」を開催し、所蔵資料を中心に江戸時代の高麗寺村の様子を紹介しました。調査の過程において、今まであまり知られてこなかった貴重な絵図が見つかりましたが、この絵図は虫損（シバンムシなどにより食い荒らされた跡）が甚だしく、折り畳まれた状態のまま固着し、開くことができなくなっていました。高麗寺村には、平成18年に大磯町の有形文化財として指定された「紙本淡彩 高麗寺村領地絵図」という絵図が4点あります。詳しく調査したところ、虫損が激しい絵図は、文化財に指定されている絵図の内、天保3年（1832）に作成されたものと同じときに作成された絵図であることがわかりました。当館では、この町指定文化財と同等の価値を有する絵図を、今後の活用を図るために修復しました。修復作業の流れを紹介します。

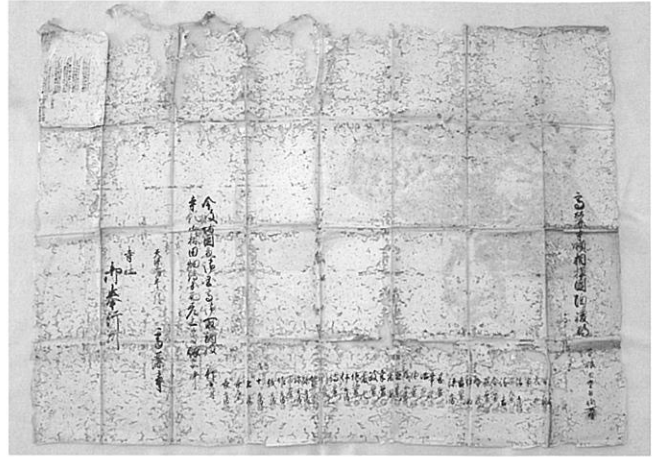
修復作業は宮田文申堂様にお願ひ致しました。改めて御礼申し上げます。

修復前の絵図の状態 表



虫損が激しく折り目に従って切れているところもあります。

裏



絵図には裏打ち紙が貼られ、裏書があります。修復するためには、一度、表と裏をはがし、それぞれを修復した後、貼り直す必要があります。

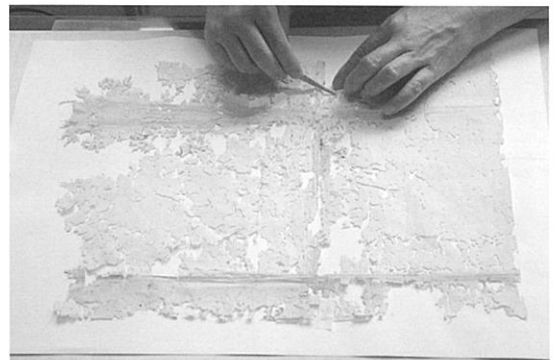
修復の工程

①剥落（はくらく）止め



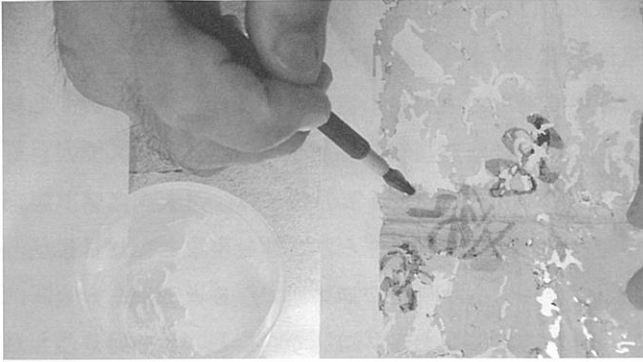
絵図は絵の具によって着色されています。修復では水を使用するため、絵の具の剥落を防ぐ膠（にかわ）を塗ります。

②解体



絵図の大きさは、縦約115cm、横約160cmですが、実は和紙を複数枚継いで作成されています。表は15枚、裏は18枚の和紙が継がれており、これらを解体して1枚ずつ修復します。

③繕（つくり）い



虫損部分の形に合わせて、補修紙を貼ります。

④継ぎ直し



繕いを終えた本紙を継ぎ直します。

⑤肌裏打ち



絵図全体に裏打ちします。

⑥貼り合わせ、乾燥



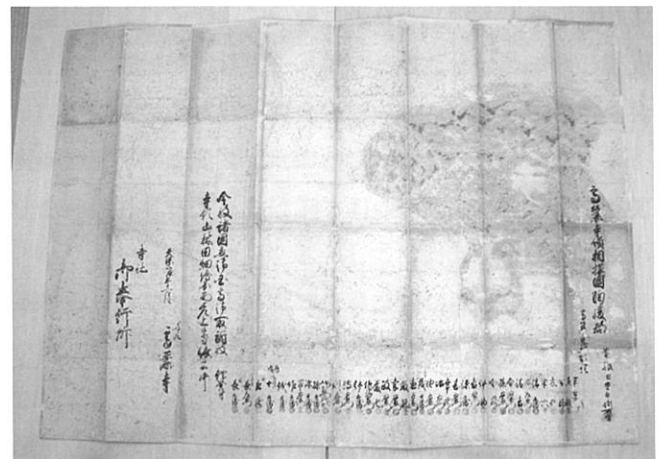
表と裏打ち紙を貼り合わせ、板に貼って乾燥させます。

⑦完成

表



裏



手に取っても壊れる恐れがなくなり、展示等に活用できるようになりました！

修復における細かい話

今回の修復を行うことにより、この絵図は四隅を1cm程、裏に返していることがわかりました。絵図を使用するとき、四隅に圧力がかかるため、補強したものだと考えられます。先人の知恵を感じます。



修復前。よく見ると
折り返しています。

(当館学芸員／富田三紗子、写真提供／宮田文申堂)

飴屋「あめ新」と坂田山心中事件の観光化

「あめ新」は山王町にあった飴屋で、平成26年に大磯町郷土資料館に関係資料が寄贈されました。戦中から戦後に店を畳んでいたことから、『大磯町史8 別編 民俗』にも、『大磯町史民俗調査報告書5 大磯の民俗(二) 大磯・東町・高麗地区』にも記載がなく、記録として残っていませんでした。

飴屋「あめ新」

資料を寄贈くださった「あめ新」を営んでいた家筋の方の話では、戦前3、4代続いた飴屋で戦中か戦後に店を閉めてしまったそうです。店を閉めた理由は2点聞くことができました。ひとつは戦争で跡を継ぐ男児が全員戦死したこと。もうひとつは菓子の材料が配給となり、変な物は作れないと言って店を畳んだとのことでした。

菓子のなかで有名だったのはカリントウで、普通の物より固く舐めれば舐めるほど味がするとされていたそうです。

飴屋家業の合間に農業もしており、カブワリやタノクサトリといった農具を寄贈していただきました。

「あめ新」関係資料は、「あめ新」と書かれた篩(ふるい)1点、焼き菓子用と思われる銅版9点、蓮の花形の菓子木型1点(裏に「昭和拾年壱月八日 大磯町山王町 飴新 ヤリブリ」と墨書)、文字・形を象る菓子木型10点、木箱3点(木箱1:前「だいそ」、後「あめ新」、内側は金属貼り、木箱2:前「あめや」、後「山王町」、黒塗り、店頭用か、木箱3:前後に「あめ新」)の計24点です。

坂田山心中事件の観光化と「あめ新」関係資料

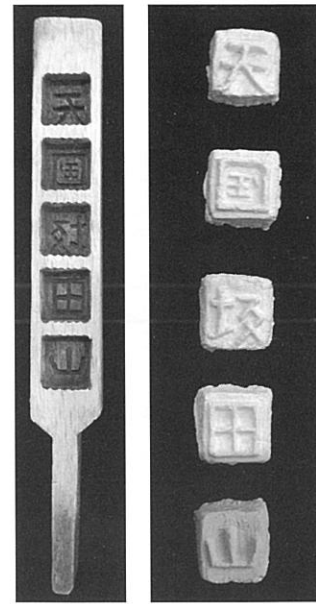
ご寄贈いただいた資料のなかでも異彩を放つのが、「天国坂田山」の5文字を象る菓子木型です。

「天国坂田山」とは、JR大磯駅の北東に存在する坂田山のことで、この地で起こり一世を風靡した心中事件から生まれた言葉です。坂田山心中事件は、昭和7年(1932)5月に坂田山(羽白山と呼ばれていたが、東京日日新聞社が詩情に欠けるという理由から当地の小字名、坂田から坂田山とし定着しました)にて慶應義塾大学の男子学生と静岡の資産家の娘が結婚を反対され、服毒自

殺をした事件です。その後、仮埋葬された女性の遺体が盗まれたことが報道され脚光を浴びました。各新聞社は、遺体盗難の異常性だけでなくプラトニックラブを貫いての心中であると強調し、特に東京日日新聞は「純潔の香高く 天国に結ぶ恋」とキャッチーなフレーズで大きく取り上げました。事件1ヵ月後には、『天国に結ぶ恋』と題される映画や歌が作られ、社会現象となりました。

事件現場であり映画のロケ地である坂田山や大磯駅には、物見遊山に観光客が訪れていたとの話を聞くことができます。土産物である絵葉書が残っていることからこのことが窺えます。しかし、残念なことに坂田山心中事件の観光化に関する資料はあまり残っていません。今回ご寄贈いただいた資料は、このことを物語る貴重な資料です。

この資料は落雁用の菓子木型で、「天国坂田山」の5文字を象ることができます(写真)。この資料から、「あめ新」では坂田山心中事件を題材とした映画などの人気に目をつけて、土産物用の落雁を開発していたこと



「天国坂田山」菓子木型と落雁模型

がわかります。しかし、この落雁が販売されていたかどうかは証言がないため、確証を得られていません。御存知の方がいらっしゃいましたらお教え頂ければ幸いです。

「天国坂田山」の落雁が世に出ていたかは定かではありませんが、この菓子木型の存在は坂田山心中事件が大きな注目を浴び、土産物を作るほど多くの観光客が訪れていたことを私達に教えてくれます。

参考文献

- ・『昭和史 二万日の全記録 第3巻 非常事態日本 昭和7年▶9年』、講談社、平成元年。
- ・『大磯町史民俗調査報告書5 大磯の民俗(二) 大磯・東町・高麗地区』、大磯町、平成10年。
- ・『大磯町史8 別編 民俗』、大磯町、平成15年。

(当館学芸員/保坂匠)

海の森クラブ活動報告

「海の森クラブ」は平成22年度に大磯町北浜海岸、大磯港、照ヶ崎海岸の海藻の目録化を目指し、活動を開始しました。活動内容は、定期的な海藻観察や標本作り、標本整理などを行っています。このほかにも海の教室「海藻おしばつくり」などで講師を担当し、海辺の自然環境保護に関わる活動を行っています。

活動当初は、海岸環境や海藻おしばに興味のあるメンバーで毎月1回、海岸に行き、漂着海藻や岩礁に生息している海藻を図鑑で調べ、記録していくという活動を模索しながら進めてきました。最初は活動日を毎月第3木曜日と固定したため、事前に周知しやすく毎回4、5人の参加がありました。しかし、活動時刻が満潮時にあたり岩礁の深部に渡れず、観察できないことが何度か重なったため、より本格的な調査活動を目指し、途中からは潮汐に合わせて観察日を決めるようにしました。活動日が不定期となり、都合を合わせる事が難しくなったためか、参加人数は若干、少なくはなりましたが、目録作成に必要な情報や資料も集まり、有意義な活動を進めることができている。

活動のサイクルは海藻の生長に合わせて変則的に、11月から翌年7月までというふうにしています。陸上の植物が季節ごとに変化していくように、海藻も季節によって変化します。海藻の種類によっては、数か月で2m近くも生長するものもあり、生長の速さに驚かされます。海藻の目録化で難しいことは、幼体と成体とでは形が変わるものがあったり、海で観察した時と海藻おしば標本にした時では、色が変わったりするものもあり、図鑑だけの判断が難しいことです。



海藻観察の様子



海藻おしば教室の様子

フィールド活動以外では、毎年10月に海藻おしば教室を開催してきました。この講座では、海の森の役割や海岸環境保全の大切さを話した後で、海藻おしば作りを行います。毎回の参加者人数は10人前後でしたが、平成25年度から夏休みの自由研究に活用できるように実施日を夏休み期間中に変更したことで、大人だけでなく、親子での参加者も増え、平成25年度には70人の方々にご参加いただきました。講座をとおして、海の中にたくさん海藻があることや、海藻の色彩が美しくバリエーションが豊かであることに参加された皆さんは感動されたようです。終了後の参加者のアンケートには「海をよごと海藻が消えてしまうので、あらためて海を大切にしないといけないと思った。」、「海の近くに住んでいるので自然の大切さを学べてよかった。」、「とても楽しかった。来年も参加したい。」など主催する側にとって、ありがたい言葉をいただき、海の森クラブのメンバーにとって励みになっています。

平成9年に発行された『大磯町史9 別編 自然』によると、大磯町では88種の海藻が記録されています。当時は確認できたが、現在では見られなくなったものがあります。海藻は同じ遺伝子であっても、地域や場所によって形が異なると言われ、観察した海藻の形が図鑑に掲載されている写真と違うことがあり、正確な同定が難しいです。本来は顕微鏡を用いての同定など、より専門性が求められるかと思いますが、難しいことはこだわらず、できる範囲で標本と記録作成を行い、海辺の自然観察に親しめるような形で調査活動を続け、目録の作成を進めていきたいと考えています。

(当館臨時職員／高山優美)

横溝精彦コレクションの郷土玩具について

調査の経緯とコレクションの全体像

平成23年11月より開始した故横溝精彦氏所有の馬に関するコレクションの調査は、先頃（平成26年10月）ようやく完了しました。その総数は1,423点、すべて馬に関係する品物であり、その内容は日用品から民芸品・置物、家具・建具に至るまで多岐に及んでいました。氏は馬が描かれているか馬や馬具を象ったものであれば、ありとあらゆるものを蒐集の対象としていました。例えば喫茶店のマッチや銀行のカレンダー・ティッシュペーパーでさえ、どこかに馬があしらわれていればコレクションに加えられました。なかには実物の自動車のエンブレムや僧侶が儀式のときに用いる払子（ほっす、馬の尾毛を束ねて柄をつけたもの）などという珍品もありました。

全体を種類別に分類した点数の内訳は以下のとおりです。

人形・郷土玩具類	303点
絵馬	43点
工芸品類	232点
切手	161点
マッチ箱	43点
書・絵画	36点
建具・家具・調度品・食器	217点
衣服・装身具	85点
馬具・馬術競技関連用品	153点
書籍・文字資料・写真・印刷物	42点
その他	76点
精彦氏自作品	32点
計	1,423点

戦前の郷土玩具蒐集ブームのなかで

蒐集点数からも見て取れますが、とりわけ横溝氏がこだわりをもって蒐集していたのが、民芸品・郷土玩具類です。新聞¹⁾や雑誌²⁾のインタビュー記事でも「郷土玩具コレクター」を自称していました。

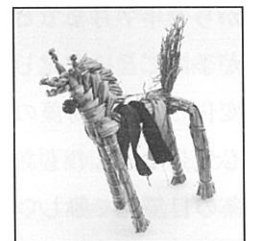
氏が郷土玩具を集めだしたのは、大学時代に全国の馬術大会に出場し、各地の民芸品店を訪れる機会に恵まれ

たからです。その後社会人になってもアマチュアの馬術競技団体に関係したり、仕事で出張するなど各地を旅行することが多くありました。旅先で馬に関係のあるものを見つけたらすぐに買い求めたので、コレクションは着実に増えていきました。「戦前金沢市や八戸市に出張したときには小さな郷土玩具をみかん箱にいっぱい買い集めて帰ったこともあった。」¹⁾ そうです。だから「（郷土玩具を）集めるのに別段これといって苦労したおぼえはない。」¹⁾ と述懐しています。実は横溝氏が大学生から社会人になったこの時期（昭和初期）は全国各地で郷土玩具の展示会や即売会が開かれたり、関連の雑誌や書籍が相次いで刊行されるなど郷土玩具蒐集ブームの最中でした。³⁾ この郷土玩具蒐集ブームの時代は、郷土玩具を新たに作り出すことが流行した時代でもありました。過去に廃れた玩具を復刻したり、土地の伝説や昔話、寺社の由緒などさまざまな物語を造型化した新しい郷土玩具（これらは当時「創生玩具」と呼ばれました。）を考案することが広く行われました。³⁾

コレクション所蔵の玩具を調べると、たしかに昭和初期に創作されたとされる玩具がいくつも見つかります。そのうちのいくつかを次に紹介します。

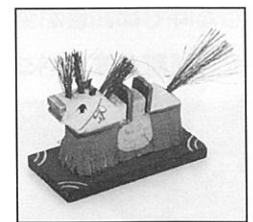
【忍び駒】

昭和3年（1928）に岩手県の花巻温泉の土産物店「長寿庵」が、稲わらを材料に製作、土産用玩具として商品化した⁴⁾とされます。



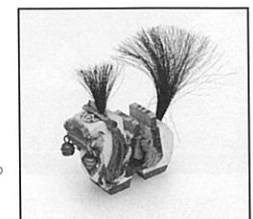
【板馬】

岩手県盛岡市で昭和初期に作られ始めました。本来は台座の下四隅に車輪が付いていますが、所蔵品では消失しています。宇治川先陣争いの水上の馬を模して作られた玩具で、台座の四隅の模様は波紋を表しているそうです。



【チャグチャグ馬コ】

「チャグチャグ馬コ」の祭礼にちなんだ東北の代表的な郷土玩具。創始については諸説ありますが、



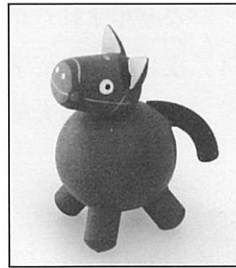
昭和初期から作られはじめたようです。製作している場所が多く、同じ「チャグチャグ馬コ」の名称でもそれぞれデザインや素材に違いがあります。桐材を使った「桐馬」も、この馬の姿を模しています。⁴⁾



桐馬

【岩井の木地十二支】

鳥取県東部の「湯かむりの里」として有名な岩美町の岩井温泉で、昭和9年に土産として考え出されたろくろ細工の玩具です。十二支すべての動物の玩具が存在しますが、コレクションには馬のみが所蔵されていました。



【一宮のおん馬】

昭和3年の考案で、愛知県一宮市にある真清田(ますみだ)神社の桃花祭(4月3日)に神輿とともに出る飾り馬を象ったものです。近隣の起(愛知県一宮市)で作られます。⁴⁾



戦後の郷土玩具の流れ

戦中戦後の混乱期を過ぎると、人々の関心は高度経済成長や生活改善に集まり、戦前のような郷土玩具蒐集ブームは下火になりました。それでも折からの国内観光ブームのなかにあった観光地にとって、郷土玩具はそこを訪れた人たちに向けた「郷土」の消費の具として必要不可欠なものでした。コレクションの中から戦後新たに創作されたものを次に紹介します。

【きびがら(ほうきぐさ)細工】

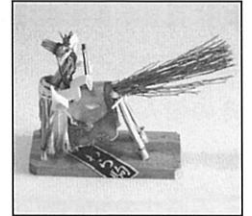
栃木県鹿沼市では江戸時代から農家の副業で座敷ほうきが作られ、生産量全国一を誇っていました。しかし昭和30年代に電気掃除機が普及すると、座敷ほうきの需要は激減します。そこでほうきの材料を使い、ほうき作りの



技術を生かして昭和37年に考え出されたのがこの玩具です。いわば戦後の生活様式の変化が生み出した郷土玩具といえます。

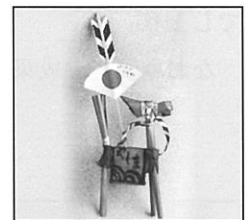
【甲斐の藁駒(御幣駒)】

源平合戦宇治川の先陣争いに活躍した甲斐駒を扱った玩具。背に御幣を差していて「御幣駒」とも呼ばれ、養蚕の守護神として戦後創案されました。



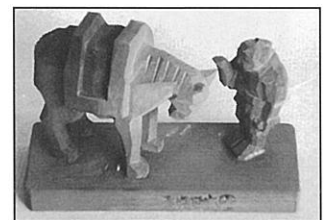
【与一駒】

戦後、八島的那須与一にちなんで地元で作られ始めました。所蔵品には「42-10-25」の注記が確認できます。これはおそらく購入したのが「昭和42年10月25日」ということでしょう。



郷土玩具と似て非なるもの

コレクションのなかには右の2枚の写真のように、見た目がよく似た木彫品がいくつか存在します。製作された地域が異なるはずなのに、同じような意匠(掌にのる大きさの台座の上に素朴な木彫りの人形が配置されている)のこれらの木彫品はおそらく「木片人形」の流れを汲む品々でしょう。



昭和8年 水上温泉(群馬県)



昭和9年 越後湯沢(新潟県)

「木片人形」とは、大正から昭和の初期にかけて洋画家として活躍した山本鼎(かなえ)が農閑期の仕事として全国の農村へ広めた木彫りの工芸品です。本来の郷土玩具が地域の様々な伝説や説話に取材し、その地方の素材を用いて製作されるものだとすれば、木片人形にその特徴を見出すことはできません。ただ、木彫の素朴な風合いと各地の風俗を反映した意匠とで当時(大正末～昭和初期)は人気を博したものだそうです。³⁾

まとめ

こうしてみると、ただ個人の好みで蒐集されたコレクションでも、その時代の社会的背景が透けて見えるようで興味深いです。加藤幸治はその著書「郷土玩具の新解釈」のなかで「ある個人が、ある意図を持って、全人生的に蒐集活動を展開してコレクションを形成する活動には、同時代の社会的背景が凝縮されている。すなわち、その個人が蒐集に没入しなければならなかった理由は、個人の知的な傾向ももちろん影響しているが、大部分はその時代の知的動向に依存している。」³⁾と述べています。横溝氏の郷土玩具コレクションは、氏の馬に対する愛着と当時の世相があいまって形成された成果といえるでしょう。

なお本調査の成果は「横溝コレクション・馬の資料目

録」という冊子にまとめて刊行します。詳細については、そちらもご参照ください。

参考・引用文献

- 1) 横溝精彦「“馬”コレクション とりこになって五十年」(日本経済新聞、1969年6月11日付)
- 2) 「郷土玩具に見る日本の馬」(ほし24号、第一銀行広報課、1966年3月)
- 3) 加藤幸治『郷土玩具の新解釈：無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』社会評論社、2011年
- 4) 成城大学民俗学研究所、特別展「伝統に生きる郷土玩具」成城大学民俗学研究所、2014年11月

(当館司書／諏訪部房代)

平成26年度博物館実習生による 「大磯の山 — 鷹取山を知る —」展

当館では、毎年、博物館学芸員資格取得を目指す実習生を受け入れており、実習の一環として常設展示室の一部コーナーを使って、実習生自らが企画から完成までを実践する展示替実習を行っています。

本年度は「大磯の山—鷹取山を知る—」というテーマで、鷹取山を紹介しています。大磯といえば海とい



【平成26年度博物館実習生】

う発想を変え、当館のテーマでもある「湘南の丘陵と海」の一つ、丘陵部に着目していただきました。学生ならではの視点が光る展示です。平成27年8月末頃まで展示している予定です。ぜひご覧ください。

Report —大磯町郷土資料館だより— No.35

平成27(2015)年2月27日発行

編集・発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL.0463(61)4700/FAX.0463(61)4660